

上原輝男の国語教育思想 心意伝承研究に基づくイメージ教育の展開と可能性

秦, 恭子

<https://hdl.handle.net/2324/4784709>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (感性学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏名	秦 恭子			
論文名	上原輝男の国語教育思想 —心意伝承研究に基づくイメージ教育の展開と可能性—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	南 博文
	副査	九州大学	教授	清須美匡洋
	副査	九州大学	教授	藤田 雄飛
	副査	九州大学	准教授	飯嶋 秀治

論文審査の結果の要旨

日本の教育において、「生きる力」への着目など様々な目標が新機軸として導入されてきたが、肝心の子ども等自身の生活状況と精神の風景は一向に改善の兆しを見せていない。本論文は、日本の国語教育において独自の足跡と「心意伝承」という民俗学者、折口信夫の発想を継承する教育の原理を追求しながらも、これまで必ずしも正当な評価を受けて来なかった国語教育思想家である上原輝男の全業績を検証し、上原が構想した「基層教育」の理念とその具体化であるイメージの自律的な展開・運動を促す感性的な教育の方向性と可能性を開示した研究である。

序章では、上原の国語教育思想に関する研究課題を3点に集約して本研究の出発点と到達目標を提示している。

第1章では、上原の国語教育研究と心意伝承研究とを貫いていた視点を把握するために、上原の生涯にわたる研究の展開を概観し、続く第2章では、上原の心意伝承研究の教育研究また国語教育研究を概観している。その結果、上原が目指したことが、個と個の間の共鳴現象としての「感染教育」(折口1926)を叶えている人間の心の普遍的な運動＝「トランスフォーメーション」に焦点を当てるものであり、かぶきを始めとする伝統的な芸能や儀礼の中にその様式・要因である「生命の指標(らいふ・いんできす)」を追究するものであったことを明らかにしている。

第3章では、上原の研究の焦点である「トランスフォーメーション」について、イメージに関する諸学の知見を参照することによって、精神人類学における「イメージ運動(イメージの自律的運動様式)」の視点を媒介として捉えれば、上原の研究において心意伝承と「トランスフォーメーション」と先験的な「イメージ運動」の体験とは全て統合して結ばれるものであることが確認された。第4章では、上原の最晩年の二つの授業の考察を通じて〈心意伝承＝先験的な「イメージ運動」〉の体験により「トランスフォーメーション」を促す上原の国語教育の理論と方法を抽出した。ここでは、「生命の指標」を教材とすることによって体感への「受容的・探索的な心的構え」を促すことを方法としていたこと、さらには心理療法や従来文学教育と比較した際、上原の国語教育は現代社会に即した通過儀礼の要素を備えていることが確認されたが、同時に課題も残されていたことを明らかにした。

第5章では、前章の授業実践からの改善を施行した上原が生前に行ない、また没後に「児童の言語生態研究会」会員らが方法を改善して再実施した俳句創作の授業を取り上げて考察した。上原が生前に見出していた「生命の指標」としての季語「雲の峰」が、子どもたちによる優

れた俳句に結晶した事例を分析し、〈心意伝承＝先験的な「イメージ運動」〉の体験を促す国語教育が可能であること、そしてその実現が子どもたちに生命力の活性化、自己実現の過程の促進、つながりの実感とそれに基づく「共感にあふれた謙虚な知性」（コップ、2012）や「生命の拠り所」の形成という教育的作用をもたらす可能性を見出している。終章では、研究を総括し、「生命の指標」など国語教育に留まらない個性化の過程に関与する将来的な課題をまとめて総括している。

以上のように、本論文は、総体としての上原照男の国語教育思想に内在していた生命活動を賦活するイメージの働きを具現する方法論を、日本語とそれが育まれてきた文化風土の中で再評価し、授業実践に展開し得る人間の基礎・深層への探究活動として捉えたものである。その点で、感性コミュニケーションという本専攻が主眼としてきたテーマに対して領域横断的な研究を言語の領域について解き明かした価値ある業績であると認められる。

最終試験

この論文について、論文調査会は、令和4年2月19日10時より、新型コロナウイルス感染防止のためオンライン形式による論文公聴会（出席者、25名）及び口述試験を、秦恭子氏及び論文調査委員全員の出席の下で実施した。

論文内容について、秦恭子氏は論文調査委員および出席者からの質問（教育としての方向性、関連する欧米の教育者との比較、感性デザインへの発展性）に対して的確な応答を行い、質問者及び論文調査委員を満足させる回答を行ったので、論文調査委員会は最終試験を合格したものと認定した。

以上のことから、論文調査委員会は、秦恭子氏が博士（感性学）を授与されるのに相応しいと判断した。